

攻撃はできず、もっぱら戦車が大いに撃ちまくったようであるが、友軍はほとんど動けず、機銃と弾薬を持ち出すのがやっとで、溝沿いにウミンガンへ脱出したという。

和氣氏が立哨中申し送った「のろし」（一月二十九日早朝）は誰が打ち上げたのか一つの不思議であったが、平成元年十月、三ヶ根山での戦車第二師団戦友会で、戦車六連隊の宮沢少尉、庄司兵長と知り合い、あの時の信号弾は庄司兵長が打ち上げたと言ったという。

また、十榴の零距離射撃中止を大室大隊長に進言したのは宮沢少尉であったことを知り、和氣氏の二人の証言者が生還されておることを不思議な縁としみじみ実感したと述べている。

また、大室大隊長突撃のとき、足に衝撃を受けて倒れた原因は、機関銃弾が両脚間をかすめて通り抜けたためで脚絆の内側が両足とも焦げていたと、我が強運に感謝していると言われた。

これは、P38双発米機の銃撃でK氏が戦死したことや、自分の倒れたトタン屋根の板には銃痕が無数にあっ

たが助かったことなどの幸運、さらに運命の別れみちは、入隊時の即日帰郷の取り消し、満州から南方に転じたこと。大室大隊のウミンガン路上での戦闘での米軍による収容……。まさに、多くの戦友が戦死し、自分一人のみが生還したという心情を持ち続け、慰霊と恩欠運動に余生を捧げたことも、生き残った我々と同じ心情であることを知った。

バタアン、コレヒドール攻略

野戦重砲の砲手

茨城県 安達 義夫

私は大正十年十一月二十日、現在の銚田市の農家の三男として生まれ、学校卒業後は農業の手伝いをしていた。昭和十五年徴兵検査はもちろん甲種合格だった。

昭和十六年一月、東京世田谷の野戦重砲第八連隊補充隊に本隊要員として入営。昭和十六年七月一日、関特演、特編第一号により、編成下令された。その間、

野砲隊要員（他に観測・通信などあり）として教育を受け、一期の検閲を終了した。

八月四日、神戸港出帆、十七日、満州牡丹江綏陽着、国境警備に従事しつつ訓練を受けていた。南方へ行くらしいとの情報を聞きながら満州を出発、十月十五日、台湾高雄港に上陸。台湾では暑さに対する三カ月間の訓練が続けられたが、その間、髪・つめを切り、私物を整理させられた。いよいよただ事ではなく、戦場に出発する心の準備もだんだんとできてきた。服装は半袖帽子の後ろには日よけの布がつけてあった。

十二月、高雄を出帆し、船上で米英に対する宣戦布告を聞き、身の引き締まる思いで、いよいよ戦闘参加かと覚悟を新たにしていた。十二月二十四日、比島のルソン島リンガエン湾上陸、マニラ、バタアン半島、コレヒドール島攻略戦に参加、第十四軍、本間中将の軍直轄、砲兵隊に配属となった。

十二月二十七日、米政府はマニラを「無防備都市」と宣言したというので、マニラは無抵抗だった。比島全般の主要部は占領したが、バタアン半島、コレヒドール

ル島要塞は攻略していなかった。

我が野戦重砲兵第八連隊の編成は次の通りである。

大正十一年八月に編成され、初代は田代庫連隊長であり、戦時編成となったのは口支事変、大東亜戦争の時であったという。私のとこの連隊長は高橋克己大佐であった。

火砲は、九二式十センチ加農砲十六門（一個大隊八門、一個中隊四門、一個分隊一門）である。「創立当初は三八式十加（独乙、クルップ社製）とホルト牽引車（米国製）でした。その後、火砲は十四年式十加（開脚式）に、牽引車は（三トン牽引車国産）となった。更に、昭和十年には火砲は九二式十加、牽引車は九二式五トン牽引車に改装され、指揮官車、観測自動車、自動貨車等の自動車数も昭和十年頃より逐次国産化、制式化された。また、五トン牽引車はその後九六式六トン牽引車に改められた」と我が連隊小史に記載されている。

私は第二大隊第四中隊第三分隊の二番砲手としてマニラを通りバタアン半島の攻撃に参加したが、敵の防

御、反撃は盛んだった。歩兵が我が陣地に侵入する。それを我が軍の重機関銃隊が戦砲隊の中にいて、共に戦ってくれ、敵の歩兵を倒してくれた。我が野戦重砲も、敵の歩兵に対し、弾丸には瞬発信管をつけ、砲身を水平にして直接照準零距離射撃もして撃退した。敵は戦車に付随して歩兵が反撃する。「窮風猫を噛む」のたとえ通り死に物狂いであった。

ここで、パラック北側の第二放列敵地での激闘について、説明する。

昭和十七年一月三日のこと、私は第四中隊第三分隊の戦砲隊の第二砲手として、バタアン半島の攻略戦に参加した。一緒に戦闘参加した兵団は大阪の部隊であった。

敵は大木が繁茂した密林の中に陣地を築き、長距離砲の十五センチ加農砲の巨弾を浴びせてきた。要塞砲であったかもしれないが、砲弾の主たるものは榴弾（弾体そのものが炸裂する）で、試射は榴散弾（砲弾の中に細かい弾が入っていて、破裂と同時に細かい弾が四方に散り負傷者が多くなる）、集中射撃は榴弾で

あった。

我が高橋部隊（野戦重砲第八連隊）は敵状不明のうち遭遇戦となったが、敵は以前からこの地を演習場として使用しており、地形を熟知しているの戦闘となったので、我が軍は敵の思うままに集中射撃を受けた。そのため敵の集中砲火により死傷者が続出した。

一月三日、正午頃であった。パラックの道路上で待機中の我が高橋部隊のそばを、野砲の兵隊が我々の前進方向と反対方向に、足早に悲愴な面持ちで口々に「とてもあきまへん」「あかん、あかん」と関西弁で叫びながら、走って行った。これはただ事でない様子であった。

その時ちょうど、高橋部隊長がそこに来られ、「ここが関東男児の意気の見せ所だ」と叫んだので、我々は命令を受け、前方の水の無いボサ（草むら）の多い砂地の河原の中に陣地を進出し、約五分間で放列布陣をした。

右側の方には松の大木があり、その松の木の右枝の先端が第一分隊の照準点となった。右から、第一、第

二、第三、第四分隊との布陣である。照準点とはその点を三六〇の分角度で、「右幾つ」「左幾つ」と間接照準をするのである。

我が第三分隊員は十六人、十センチ加農砲（砲身が山砲や榴弾砲に比べ長い）で、弾の距離が長く飛ぶ（一八二〇メートル）砲である。戦砲隊の後ろには弾列（弾薬を担当）があり、観測は砲と離れた観測に便利な高所などに配置され、砲と観測との間を結ぶのが通信である。

射撃号令がかかり、「照準点右側方、松の木の頂上右の側、方向一六〇〇、榴弾瞬発信管、装薬二号、六五〇〇、第一発射」につづいて込め「撃て」の号令のもと、第一分隊から射撃開始となった。時間にして一分もたたぬ頃、軽い発射音を聞いたと同時に、第一分隊砲口前、五メートルぐらいのところは一発、野砲（口径七五ミリ）級と思われる敵の砲弾の弾着があったが、そのまま第一分隊による試射は続けられた。

第一分隊で一発発射することに、敵から二、三発の返射があり、初めから集中射撃の様相を呈していた。

射撃教範にあるような、試射による夾叉などの射撃でなく、初めから我が陣に集中射撃を浴びせてきたのだ。た。

集中砲撃を受けた我が砲手などは、まず手で、鉄帽でと、手当たり次第に何でも使って砂地を掘り、少しでも低い場所を作り、身の置き場である個人壕を夢中で掘った。試射が終われば、やがて中隊射撃となり、我が第四中隊の古世隊は斉整として射撃を続行したが、敵も盛んに集中射撃を我が隊に浴びせる。我々砲手はその間をぬって、砂地を掘って、少しでも低いところ、凹地を作り身体を入れる個人壕を作りつつあった。

間断無く弾着する敵砲弾は私たちをおびえさせた。その上、我が観測所では、敵の砲兵隊の所在すら未だに捕捉できず不明であったので、放列陣地は、こちらには着弾するのに、我が砲の弾着は分からないから、不安で、将兵のあせりは士気を沈滞させているのが目に見えて明らかだった。と、これは我々一等兵は夢中だったが、後に指揮官や下士官から聴いた話である。

これも後の話だが、第一小隊長の小野少尉は左斜め

前方の松の木の枝の一部に、敵の射撃標定に有利な物体のあることを想定して、放列から電話で古世隊長に盛んにその松の木を射撃するようにと、再三にわたって意見具申したが、許可されず、依然として敵の集中射撃の中に放列陣地がさらされていたという。

この砲撃戦の最中に、私の所属していた第三分隊、中野分隊の陣地に敵弾が落下し、轟然たる爆発音と爆風で放列陣地は一瞬にして暗黒の爆煙に包まれた。ほんの一瞬のことだったが、これが生死の運命を分けた一瞬だった。砲手たちのうち、三番砲手の山崎一等兵、四番砲手の高田上等兵、第四米津分隊から遞伝兵（連絡兵）として第三分隊砲側に位置を命ぜられた十番砲手の酒井一等兵が鮮血に塗られ各自の持ち場で倒れた。二番砲手である私は、左腕上膊部に敵榴弾破片創を受けた。そして、現在も肉を削られたあとを残している。一番砲手の木村国太郎一等兵も私と同様左上膊部に敵榴弾破片創を受けたが、二人とも、出血止めのない状況の中のことであった。そのとき砲側の戦友たちは、我々負傷者のそばに駆け寄って、中野分隊長と共に

に介抱に努めてくださったのだ。

砲のそば一・五メートルの所にいた山崎一等兵の帯革は榴弾の破片で切断されてしまい、腹部には首貫榴弾破片創を受け、軍服を鮮血で染めており、小隊長、分隊長、砲手などが駆け寄った。中隊に二人しかいない衛生兵も走ってきて応急の手当てをしたが、その甲斐もなく、「お母さん、お母さん」と幾度か叫び、最後に苦しい息の下から「天皇陛下万歳」と叫んで壮烈な戦死を遂げたと、後になって聞いた。

四番砲手の高田上等兵は山崎一等兵の左、第四分隊側で榴弾破片を頭部に受けたため、鉄帽が割れて飛び散り、上半身の軍服を血に染め、一発で壮烈な戦死をされていたし、第四分隊から遞伝兵として第三分隊の砲側に出されていた酒井一等兵は、横山一等兵のそばで、左頭部に榴弾破片創を受け、その持ち場を守り、壮烈な戦死を遂げた。

私も木村一等兵も自分で止血し、仮包帯を施したが、その間にも、敵の砲弾は間断なく我が陣地に落下し、危険このうえなかった。我が第三分隊放列を中心に落

下した砲弾は十二時三十分頃から十三時五十分まで約一時間半近く続いたことになる。しかし、我が第三分隊は中野分隊長の適切な指揮によって、分隊の生存者全員が負傷の痛みをおさえて、自分の持ち場である放列より離れることなく、この場を死所と定め、第一、第二、第四分隊と共に砲撃を続行して、前面の敵を撃退した。

なお壮烈な戦死をされた我が分隊の三人の勇士は、間もなく看護兵並びに中隊段列の兵士により放列陣地の戦友に見送られながら後送されていった。この戦闘で弾列の長谷川一等兵も榴弾破片創を受け、名譽の戦死を遂げられたことを知った。この激烈な戦闘も夕刻になって砲戦は止んだ。

その後、後方の中隊段列から握り飯が各人二個配られたが、我々は味も何も分からぬ程心労していた。自分分は、今日は命を拾ったものの明日の命は分からない。そして、戦友同士は、お互いに手を握りしめながら、この兵隊たちも明日の命は分からないなあと思った。

太陽が落ち、夕闇が迫る頃になると、先程までの激

戦のあった戦場とは思えぬ静寂がそこにはあったが、戦死した友のことは忘れることができなかった。

第一次バタアン半島攻略は作戦失敗し、約七キロ後退し、建て直しを図り、いよいよ第二次バタアン攻略戦に入った。大本営は第十四軍に対し兵力を補充、三月二十七日、バタアン攻撃下令。四月三日、バタアン半島第二次攻撃が開始された。この攻撃には、野戦重砲八連隊はもとより、二十四センチ榴弾砲、十五センチ加農砲を含む総計三百門に達する砲兵が参加した。

第二次攻撃には、大本営から辻政信作戦班長、瀬島龍三両参謀が、関東軍から久米、畑中両参謀らが派遣され、第一砲兵司令官北島中将も戦場に到着し、野戦重砲兵第一連隊長入江元大佐から任務を継承した。

第二次バタアン攻略戦（二月十日～四月十二日）

コレヒドール攻略戦（四月九日～五月七日）

米比軍降伏（五月六日）

マロス付近駐留（五月十一日～六月十日）

マニラ発、東京世田谷原隊へ復員完結（七月十二日）

コレヒドール要塞攻略は、上陸せず、バタアン半島

の端からコレヒドールを砲撃し、湾内の船舶も砲撃撃沈した。コレヒドールの山は樹木が一本も無くなり赤く枯れてしまった。日本軍の飛行機は敵上空から反転する。反転場所に砲の攻撃目標がある。野砲第八連隊の十センチ加農砲は、この目標を飛行機からの無線で修正して砲撃した。戦争末期のフィリピンでは、米軍の偵察機が日本軍の目標を砲兵に無線し、砲撃被害は甚大となった。緒戦においては日本軍がこのようにして米比軍を破ったのである。

しかし、コレヒドール要塞からは三〇センチと五〇センチというドラム罐のような砲弾で我が陣地を砲撃してきたが、五月七日第四師団は同島を占領、ウェンライト米極東軍司令官は無条件降伏し、在比米軍に投降を下令した。

野戦重砲兵第八連隊は、五月十九日復員を命ぜられた。しかし、その間に第二次バタアン攻略、コレヒドール要塞戦があった。

前に述べたように、私は一月三日のブラック北側放列陣地に対する敵の砲撃で、左上膊部に破片創と至近

の爆風の熱でやけどを負ったが、多くの戦死傷を出し、分隊長代理としての重責を負っていたので、入院することはできず、戦い続けた。

その頃、本土に対する米空軍機の初空襲が東京を中心にあった。そのため、バタアン・コレヒドール要塞を攻略し、在比米軍の降伏ののち、内地防衛、防空のため、我々野戦重砲兵隊が急きょ内地復員となった。

昭和十七年六月十二日 マニラ出発

六月十七日 台湾高雄寄港

六月三十日 東京世田谷着、上等兵に進

級

七月十二日 野戦重砲第八連隊編入

十八年十二月一日 兵長となる

十九年三月十五日 現役満期除隊となる

内地復員し、家に帰ったが、戦況はだんだんと悪化し、我々が攻略したフィリピン諸島にも米軍が上陸、我が第十四方面軍将兵、山下奉文軍司令官以下の悪戦苦闘が続いている頃の昭和二十年一月十四日、常磐部隊（第二一四師団）編成のため、宇都宮東部第四十部

隊小沼隊に応召、同年二月、伍長に任官し西原隊に編入、第三分隊長を命ぜられた。

部隊は馬編成であり、四月、常磐部隊編成完了し、栃木県大田原中学校を兵舎として、本土防衛の任務に就いた（第十二方面軍、第三十六軍隷下）。この任地で終戦、復員となり、銚田の家へ帰ったのである。

我々がいくら激戦で犠牲が多くとも、進攻作戦の勝戦であったので、戦後、フィリピンの生き残りの人々の話を聞くと、戦争末期のルソン、レイテ島などの島々での激戦は想像もつかぬものであり、緒戦のとき、我々は友軍偵察機により弾着を修正していたが、十九年、二十年の戦場では米軍がするようにして我が軍を苦しめたとのことで、まさに攻守所をかえられた悲惨さを想像する。比島諸島においては開戦以来五十一万八千人の方々が戦没されたと聞いている。我々の仲間もその中に含まれていることを思うにつけ、御冥福を祈ること切なるものがある。

【解 説】

開戦後、日本軍がリンガエン湾に上陸したとき、マッカーサー将軍は、マーシャル参謀総長あて急電を打った。内容は、日本軍の兵力を二倍以上に、米比軍の兵力を半分に報告し、マニラ放棄、バタアン半島撤退を示唆し、コレヒドールはあくまでも死守するつもりとの報告であった。

北部ルソン部隊司令官ウェンライト将軍はサンミケル（カバナトゥアンの防御線を十二月三十日と発表した。ケソン大統領などは家族、吏員と共に、二十四日午後、極東軍司令部は同日、共に内海汽船によりコレヒドール島に移動した。また極東軍航空司令官は同日飛行艇により濠洲に向け比島を撤退した。

アジア艦隊司令長官は、十二月二十六日潜水艦によりマニラを撤退した。そのため比島水域残留艦艇は砲艦三、掃海艇三、魚雷艇六程度となり、潜水艦も三十日までに全部比島水域を去ったという。

このように、米比軍はマニラを放棄し非武装都市宣言をした。主力はバタアン半島、コレヒドール島へと

撤退したのである。このような状況下で、軍は、バタアン半島の米比軍に対し、次のごとく判断していたという。

一 兵力不明だが敗残の米比軍であるから、目下の進撃の勢いに乗じ急追すれば、バタアンの撃破は困難でなからう。

二 バタアン半島の防備施設など明らかでないが、堅固な陣地はまだ構築されていないであろう。

三 ただし、コレヒドール島は海上要塞であるので、攻略は必ずしも容易でないので、封鎖作戦法によらねばならぬかも知れない。

この頃、南方軍から第五飛行集団主力と、目下攻撃中の第四十八師団以下過半数の転用時期が予定より遙かに早められる件につき電報が到着したが、第十四軍（比島攻略軍）は一月二日、次のような命令を出した。

一 第五飛行集団ハ主力ヲ以テ「バタアン」半島方面ノ敗敵ヲ攻撃スルト共ニ高橋支隊、第四十八師団、第十六師団ノ作戦ニ協力スベシ

二 高橋支隊（野戦重砲兵第八連隊長高橋克己中佐の指揮する歩兵第九連隊、京都、野砲兵二個中隊、一〇加一個大隊、野戦重砲兵第八連隊を基幹とし、当時マバラカットに進出）ハ当面ノ敵ヲ撃破シテ速ヤカニ「デナルピアン」付近ニ進出スベシ

三 第四十八師団関係
四 独立重砲兵第九大隊関係

この日の状況で、二日夜、マバラカットを出発した軍直轄の「高橋支隊」は、ポーラック付近を占領している砲十数門を有する米比軍に対し、三日朝から攻撃中であつたが、第四十八師団の指揮下に入り、依然攻撃を続行した。

四日、朝から、高橋支隊は攻撃を続行したが、米比軍の抵抗が頑強なため、攻撃は容易に進捗しなかつた。夕刻になり、先に師団の指揮に入りタルラックから南下中の独立重砲兵第九大隊が戦闘に加入した。支隊は夜になつても依然攻撃を続行し、ついに後半夜、米比陣地を突破した。

五日朝から追撃に移った高橋支隊は、七日朝デナルピアン（マニラ湾とスピク湾の頸部の要地）に進出した。

以上のように防衛庁防衛研究所著の戦史叢書（2）に記載されている。従って、この戦況は、野戦重砲第八連隊（高橋部隊）がパラック北部の激戦後の進撃の概要である。

バタアン半島及びコレヒドール要塞付近に集結した米比軍は、駐比米師団、第一、第三十一師団及び要塞砲部隊で、その兵力は約三万五千、ほかに第十一、第二十一、第四十一、第五十一、第七十一、第九十一師団の敗残部隊、戦車二個連隊など五千ないし一万で合計四万ないし四万五千人及び戦車約四〇両と判断されていた。

しかし、バタアン半島攻略戦は応急的であったため第一次攻略戦はとん挫してしまつたと言つていい。比島攻略戦は、ジャワ島の攻略のように一気呵成にはいかなかった。大本営は、バタアンによって頑強に抵抗

している米比軍に対しては、充分な準備をし、相当の日数を要すると判断していたが、南方軍は、比島攻略軍である第十四軍にあくまでもバタアン、コレヒドールを同時に戡定させようとしていた。

また、同時にミンダナオ島も戡定できる目途がたつたので、第十四軍に現兵力をもつてバタアン攻略に全力を傾注させれば、大本営の希望に沿えることとなるなど、第二次戦開始となつた。

比島ネグロス島の死闘

地獄谷からマンガラガンを越えて

茨城県 齊藤 藤左衛門

今次大戦には幾つかの山があつた。比島ネグロス島の戦いもその一つである。

昭和十九年六月十五日、東部第三十七部隊で軍装検査を受け、宇都宮東部第三十六部隊、高崎東部第三十八部隊とともに東部第四十二部隊に集結編成された。